愛するってどんなこと？

奨励	栗原 宏介〔くりばら・こうすけ〕
奨励者紹介	日本キリスト教団奈良教会牧師 同志社大学キリスト教文化センター非常勤嘱託職員

わたしの目にあなたは価高く、貴く
わたしはあなたを愛し
あなたの身代わりとして人を与え
国々をあなたの魂の代わりとする。

（イザヤ書　４３章４節）

たとえ、人々の異言、天使たちの異言を語ろうとも、愛がなければ、わたしは騒がしいどら、やかましいシンバル。たとえ、預言する賜物を持ち、あらゆる神秘とあらゆる知識に通じていようとも、たとえ、山を動かすほどの完全な信仰を持っていようとも、愛がなければ、無に等しい。全財産を貧しい人人のために使い尽くそうとも、誇ろうとしてわが身を死に引き渡そうとも、愛がなければ、わたしに何の益もない。

愛は忍耐強い。愛は情け深い。ねたまない。愛は自慢せず、高ぶらない。礼を失せず、自分の利益を求めず、いらだたず、恨みを抱かない。不義を喜ばず、真実を喜ぶ。すべてを忍び、すべてを信じ、すべてを望み、すべてに耐える。

愛は決して滅びない。預言は廃れ、異言はやみ、知識は廃れよう、わたしたちの知識は一部分、預言も一部分だから。完全なものが来たときには、部分的なものは廃れよう。幼子だったとき、わたしは幼子のように話し、幼子のように思い、幼子のように考えていた。成人した今、幼子のことを棄てた。わたしたちは、今は、鏡におぼろに映ったものを見ている。だがそのときには、顔と顔とを合わせて見ることになる。わたしは、今は一部しか知らなくとも、そのときには、はっきり知られているようにはっきり知ることになる。それゆえ、信仰と、希望と、愛、この三つは、いつまでも残る。その中で最も大いなるものは、愛である。

（コリントの信徒への手紙一　１３章１―１３節）

愛をもって・・・

皆さん、おはようございます。今日は、リーダークランツの皆さんが大変すばらしい曲を歌ってくださいました。ありがとうございます。「愛」というテーマで「いざ起（た）て戦人（いくさびと）よ」を歌うのは、なかなか度胸があるなと思いましたが、私たちもこの困難な時代のなかで、武器を捨てて愛をもって戦う人になっていきたいという意味で私は捉えました。そのように勇ましく進んでいけたらと願っています。

愛するって難しい

さて、今学期は「隣人を自分のように愛しなさい」という統一テーマが与えられています。この言葉にはいくつかの前提条件や、あるいは言葉に対する意義付け・思いというのが必要になってくると思います。「隣人を自分のように愛する」。その隣人とは誰かとか、愛すべき自分とは誰かとか、愛とは何かとか。いろいろと思い巡らす必要があると思います。今日は限られた時間ですので、そのなかで愛するというところに着目して思いを向けていきたいと思っています。

私はここで、まさにこのクラーク・チャペルで、今まで30件余りの結婚式を執り行ってきました。先週の土曜日も、ここで結婚式の司式をいたしました。その時に話したことを今日はお話ししようと思っているのですが、少し視点を変えてそのお話をしていきたいと思います。

私はいつも結婚式のなかで、特に要望がなければ、いわゆる「愛の賛歌」と呼ばれている「コリントの信徒への手紙一１３章」を読んでメッセージを語っています。

この聖書箇所は、いかにも結婚式にふさわしいと思われる方がおられるかもしれません。けれども、結婚生活を振り返るなかで、このことはとても難しいことであるという実感をもたれている方もいらっしゃると思います。結婚して10年を経た私もまたその一人です。本当にこの箇所は身に沁みます。沁みるくらいならまだいいのですが、痛いのです。読むたびに心が痛みます。

皆さん、試しに「愛」という部分にご自身の名前を入れて読んでみてください。私は「宏介」という名前ですから、ちょっと読んでみます。「宏介は忍耐強い。宏介は情け深い。ねたまない。宏介は自慢せず、高ぶらない。宏介は礼を失せず、自分の利益を求めず、いらだたず、恨みを抱かない。宏介は不義を喜ばず、真実を喜ぶ。宏介はすべてを忍び、すべてを信じ、すべてを望み、すべてに耐える」。自分の名前を入れると、それが成立しない言葉になることに気がつきます。最初からダメです。忍耐強くありません。おいしそうなスイーツが冷蔵庫にあって、連れ合いのものだと知っていながら、私は我慢することも忍耐することもできずに食べてしまうことがあります。そこにはきっと忍耐強くなく、愛が足りないのですから、もちろん喧嘩になるわけです。

愛は情け深い。私は牧師ですが情け深いかと言えば、そうではないと思い当たることがたくさんあります。

「ねたまない。愛は自慢せず、高ぶらない」。私は、振り返ると自分のことをたくさん言っています。「自慢しい」です。「自分の利益を求めず」。けっこう打算で生きているな、と思います。「いらだたず」。これは難しいですね。よくイライラしています。些細なことでイライラするから、きっと喧嘩になるのでしょう。そうしたことを一つひとつ挙げても当てはまらないという現実が見えてくるんです。

難しいからこそ

この言葉、一読すると大変いい言葉だなと思います。けれども、実はそれを実行しようとすると、話が別になってきます。聖書というのは、実はそうした言葉がたくさんあります。いいこと言ってるな、と思うのですが、それを実行しようとすると、あるいは「実行せよ」と命令されると尻込みしてしまう。「いやいや、不可能だよ」ということがたくさんあります。

タネを明かせば、この箇所で言われている「愛」という言葉は、「神の愛」を表しています。ですから、自分の名前を入れ込んで読むというのはお門違いなわけです。ここでは「神は忍耐強い」あるいは「キリストは忍耐強い」と当てて読むべきであって、そもそもそこに「私」は当てはまらないのだということを理解しておく必要があります。

でも、自分の名前を入れ込んで読んでみると、自分の姿がよく見えて、それはそれで非常にいいと思います。先ほども言ったように、いろいろな形で私たちにかかわるいい言葉はたくさんあるけれど、聖書には実行できない、不可能なことがたくさん書いてあると言いました。皆さん、ご自身の経験を振り返ってみてください。小さい時に親から、あるいは近しい人たちから、たとえば「勉強しなさい」と言われたことがないでしょうか。あるいは、「早く食べなさい」とか「早く起きなさい」は定番の言葉かもしれません。私も散々言われてきました。なぜ言われるのか、考えたことがありますか。なぜ言われるのでしょうか。そうです、できていないから言われるんです。宿題をすでにしている子に「宿題をしなさい」とは言いませんし、起きている子に対して「早く起きなさい」とは言いません。すでにご飯を食べている子に対して「ほら、早く食べなさい」とも言いません。聖書も同じなのではないかなと思うのです。できていないから、難しいことだから、さらにそれが大切なことだから、あえて書いてあるのかなと思っています。きっとそうなのでしょう。私たちがすでにできていることに対して、こうして聖書が２０００年もの間、読み継がれていくことはないのだと思うのです。これだけ長い時間がかかっても、私たちにはできていないこと、あるいは難しいこと、でも大事なことだからこそ、読み継がれ、残ってきたということなのだろうと思います。だから、聖書に書いてあることを前にして「あぁ、私たちにはできない」と匙を投げてしまう、「綺麗事ばかり言っている」とそっぽを向いてしまうというのは、ちょっと結論が早いように思います。そうした書いてある事柄を前にして、綺麗事ではすまない、その背景にある人間の現実を見つつ、私たちはこうした言葉を受けてどう生きていくのかを考えるということが、まず大事なんだろうと思います。

愛の在り方

さて、愛の姿は忍耐強いとか、情け深いと書いてあるわけですが、では、愛するってどんなことなのか。忍耐強くあること、情け深いこと、妬まないでいること。自慢せず、高ぶらないこと。神の愛が人間の思いや限界を超えていることを伝えたいのは分かります。私たちはそのような愛に守られているということを伝えたいのも分かります。しかし、果たしてそれだけなのかと、ちょっと思います。皆さんも考えてみてください。やっぱりこの愛の在り方を、私たちの生きる現実のなかで実感したいのです。人間には実行できない数々のお題目を挙げているということが、私たちの生きる歩みにどう生かされていくのかを考えてみたいと思います。

忍耐強くあること、情け深くあること、妬まないでいること、というのは、実は私と共に誰かに向けてなされている言葉です。人間関係のなかでなされていくのが愛するということです。「自分のように愛しなさい」ということで、自分で完結している愛の在り方もありますが、聖書はそこからさらに「隣人を愛しなさい」ということを加えて、人と人との関係性に思いを向けます。つまり、愛するということは、人と人との関係性のなかで発言すること、見えてくること、実行されること、実現していくことであるということが言えると思います。

その愛は、「愛の反対語は無関心である」という言葉に象徴されていると思います。つまり、愛というのは関心をもっている状態であると言うことができるでしょう。関心をもつということは、そこに他者の存在がある、対象となる誰かがいるということです。誰に向けてその愛の視線を向けるか。どこにその愛を向けていくか、祈りをなしていくのかということが重要な課題でしょう。関心をもっている状態が愛なのです。

先ほど読んでいただいた「コリントの信徒への手紙一１３章」の最後の方では、「はっきり知られているようにはっきり知ること」というように「知る」という言葉が重複して書かれています。知るということは、まさにその関係性を表している言葉です。愛は知ること、人に想いを向けること。そこにはヒントが隠されているようです。

そしてさらに言えば、キリスト教って不思議な宗教だな、と私はいつも思います。「信仰と、希望と、愛、この三つは、いつまでも残る。その中で大いなるものは、愛である」と記されています。宗教だから、「信仰が一番大事。信じる気持ちが大事。信じれば救われる」というメッセージの方が分かりやすいと思ったりするのですが、聖書はそれを本当の姿と語りません。信仰や希望に優先して愛がある、と語っています。不思議な宗教だな、と思います。

さらに、「山を動かすほどの完全な信仰を持っていようとも、愛がなければ、無に等しい」とまで言っています。完全な信仰をもっていても、愛がなければ何の意味もないよ、ということを言っているんです。愛が優先している、そしてその愛を基として信仰や希望もある、ということを言っています。だとすると、やっぱり愛するということが、とても大事だということが見えてきます。

愛に押し出されて歩む

武器を捨てて、愛をもって私たちはこの世を歩んでいきたいと思っています。そうありたいと思っています。愛をもって歩んで、立ち上がっていくということ。どんなことかと言うと、まさに関心をもって歩んでいく。この世の出来事に思いを向けて歩んでいくことだろうと思います。そして、さらに実はこの「隣人を自分のように愛しなさい」とか、「愛とは何か」という事柄のなかに、聖書の根本となる、前提となるようなことが書いてあります。それが、先ほど読んでいただいた旧約聖書の箇所に記されています。「私の目に貴方は値（あたい）高く、尊く、私はあなたを愛している」という言葉。そう、実は私たちが頑張って愛するよりも前に、それより優先して私たちは愛されているのだという事実がそこに書いてあります。実は、私たちは自分がどう思おうが、まずは愛されているのです。その愛されているということに対する愛の在り方は、どんな愛かというと、先ほどの15項目の「忍耐強い。情け深い」、それから続く言葉なのです。

実は今日の聖書箇所は「愛しましょう」と勧めているのではなくて、私たちはこのように愛されているという前提を語った言葉なのです。ですから、まず私たちはその愛を感じるところから始めて、その愛に押し出されて歩んでいくということに思いを向けて、そしてその愛を人に届けるということを祈りながら歩んでいけたら、素敵な一生を送ることができるんだろうなと思っています。

残念ながら私たちが生きるこの社会、その現実というのは、愛が足りないと思うことが多々あります。自分自身に対しても、そしてその自分が生きているこの世界に対しても、社会に対しても、愛するということは難しいという現実が厳然と横たわっている。けれども、だからこそ、ここにある私たちは、愛するということに強い関心をもって歩んでいきたいと思います。それこそが「隣人を自分のように愛しなさい」という聖書の勧めを体現していく生き方だろうと思っています。愛せない自分、愛することがなかなか難しい、本当の愛に至れない自分。そんな自分の姿をしっかりと受け止めるということも大事なことだろうと思います。そうした弱さを自覚し、そして痛みを知り、本当の愛に向かっていく視点をもつ。皆さん、愛に押し出されて共に手をとり合って歩んでいきましょう。

２０１３年5月１５日　今出川水曜チャペル・アワー「奨励」記録